

日蓮聖人は「日本国」を三視點より重要視した。(一)は「神国としての日本」、(二)は「法華経有縁の日本」、(三)は「本国土妙としての日本」である。

(二) 宗祖の花押と一字金輪

伊勢神宮の神官・渡会家が記した高庫藏秘抄に収まる「妙見秘記」によると、

「軸星諸星頂輪王……一字金輪……御本地仏眼仏母如来也……出阿字本学都、住真如実相満月輪。亦一字金輪住一切衆生心月輪。転成尊星王。……变成妙見菩薩。顕昼日天子。顕夜月天子。此日月和合顕明星天子」


とあり、妙見星は紫微宮に居住し、不動の星で諸星の中心たる「軸星」であり「諸星の王」である。よって妙見星は天皇の「星」であり、天皇は紫宸殿に座し南面する。背に北辰妙見星を戴く。天皇は地上における最高の王たる転輪聖王の最高位、「一字金輪王」となる。天皇の本命星は北辰で仏智の最尊「一字金輪仏頂」と考えられた。一字金輪の種字はブルーン (Bhruṇ・一般的にポロン) である。結跏趺坐し法界定印を結ぶその上に金輪をおく「釈迦金輪」と、日輪中に五智宝冠をつけ智拳印を結ぶ金剛界「大日金輪」の二種がある。

高庫藏秘抄によると、一字金輪の転輪聖王は尊星王として北辰妙見となり、その北辰のエネルギーは日天子、夜は月天子、そして日月和合して明けと宵に明星天子となって顕れると説く。

日蓮聖人の大曼荼羅本尊に梵字の種子で主尊を表している。「**ん**」は不動明王、「**ん**」は愛染明王と理解されて

いる。「^{バン}バン」は本来、金剛界の大日如来や法界虚空蔵を表している。「^{ウン}ウン」は愛染明王、金剛菩薩、転法輪菩薩、蔵王権現、訶利帝母（鬼子母神）を表する。不動明王の種子は本来「^{カン}カン」であり、宗祖はどちらを書かれたのだからか。真言でいう大日三尊は、大日如来はバン（^{バン}バン）、不動明王はカーン（^{カン}カン）、愛染明王はウン（^{ウン}ウン）である。

バン



大日如来
金剛鎌菩薩
金剛拳菩薩
法界虚空蔵

ボロン



一字金輪仏頂
熾盛光仏頂
大輪仏頂

ウン（ウム）



意義
無怖畏の義
恐怖
大請願
能満願

(三) 宗祖の病状と賢王思想

日蓮聖人の消息文、本尊に自署を表す「花押」がある。山川智応師、鈴木一成師の研究により、宗祖の花押は「^{バン}バン」字と「^{ボロン}ボロン」字を用いられたと言われている。ボロンは一字金輪仏頂尊の種子である。転輪聖王に四種あり、鉄輪王は一天下統治、銅輪王は二天下、銀輪王は三天下、金輪聖王は四天下を統治する。玉沢門流の鎌倉浜の法華寺・常楽院日伝が康正三年八月十三日（祖滅一七六）に、弘経寺日位に授与した「御本尊相伝抄」十九條の「御判形ノ事」によると、

「第十九、御判形ノ事。是ハ文字ニト習フ也。其トハ判ノ初ハ愛染ノ梵字^{ウン}字也。一義ニ云ク、^{ボロン}字也。其ハ一字金輪ノ梵字也。是ハ星也。次ニ^{フラビテ}蔵手ノ事。是ハ^フ字也。物ヲ養フ義也。去ル間、日蓮ト遊シテサテ判ヲ遊シ留ムル時^フト遊ス。是ハ日月等シク相並ヘ玉フ意也。御判形ノ廻リヲ大ニマハシ給フ事ハ、是ハ一闍浮提也。其ノ上ニ日月出デ玉フト云々。サテ愛染ノ^{ボロン}字ヲ書キ給フ事ハ、是ハ一大三千界ニ愛敬セラル、意也。広宣流布ノ

意也。」

とある。宗祖の花押文字に、一字金輪の種子ボロン字がある。「一字金輪」は星とし、**㊦**を廠手と名づけ月を象し、日蓮の御名の日と合して、宗祖花押に「三光天子の象」を含有している。また花押に山が三つ、円が大きく描く「九山八海」は四洲（一閻浮提）を表し、宗祖が転輪王と再生し、四天下統一するを象している。蒙古使御書（建治元年九月）に

「一切の大事の中に国の亡^ルるが第一の大事にて候也。……仏のいみじきと申^スは、過去を勘^ヘ、未来をしり、三世を^ト知しめすに過^キて候……所詮萬法は己心に収^マて一塵も欠けず。九山八海も我身に備^ハて、日月衆星も己心にあり。」①

日蓮聖人の花押は、文永建治期にバン^ン㊦を用い、弘安元年（一二七八）五月二十二日の「霜雨御書」まで使用する。同年六月二十五日の「日女御前御返事」より一字金輪仏頂尊の種子、ボロン^ン㊦の花押を使用される。覚禪抄や阿沙婆抄、法華秘決によると、バン字は釈迦・多宝如来の智仏・理仏を一つにした妙理智拳印の種子とする。また火生三昧・焼滅煩惱の「不動明王の種子」としている。法華経神力品の「日月ノ光明ノ能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯ノ人世间ニ行ジテ能ク衆生ノ闇ヲ滅シ、無量ノ菩薩ヲシテ畢竟シテ一乘ニ住セシメン」の经文に通じている。

仏教の宇宙成立観・五輪思想によると空（**㊦**）、風（**㊦**）、火（**㊦**）、水（**㊦**）、地（**㊦**）の水大（**㊦**）に大空点、を打ったのが^{バン}㊦である。よって宗祖の本地・上行菩薩は水大の知恵を象している。火生三昧の「火」と、五輪思想の「水大」は相克関係だが、日蓮聖人の花押にはその両面を有している。それ故、信仰を語る時、宗祖は「火」の如き信と「水」の如き信仰を語る。

「何なる世の乱れにも、各々をば法華經・十羅刹助給へと、湿木より火を出し、乾土より水を儲けんが如く強盛に申也」②

「抑今の時、法華經を信する人あり。聴聞する時は、もへたつ（燃立）ばかりをもへども、とをざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申はいつもたいたいせず（不退）信する也。」③

日蓮聖人は自らの花押をバン字からポロン字に変えた。その理由は他宗との宗教討論「公場対決」の実現により、法華經による宗教統一「一国同帰」を可能にする思想発展によるものと考えられる。建治四年は疫病流行により二月二十九日、弘安元年と改元された。改元より一ヶ月後の三月十九日、鎌倉の状況が速達にて身延の日蓮聖人の許に同二十一日戌刻に届いた。「諸人御返事」には、

「日蓮一生の間の祈請並に所願（公場対決）、忽ちに成就せしむるか。将又五五百歳の仏記宛かも符契の如し。所詮真言、禪宗等の謗法の諸人等召合せ、是非を決せしめば、日本国一同に日蓮が弟子檀那となり。我が弟子等の出家は主上（天皇）、上皇の師とならん。在家は左右の臣下に列らん。将又一閻浮提皆此の法門を仰がん。」（原漢文）

④ 同日の三月二十一日、三位阿闍梨に与えた「教行証御書」には、

「彼此是の如き次第、何なる経文、論文に之を出すや等云々。其外常に教へし如く問答対論あるべし。……日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず。……法華經と申す大梵王の位にて民とも下し、鬼畜などと下しても、其過あらんやと得意で宗論すべし。」⑤

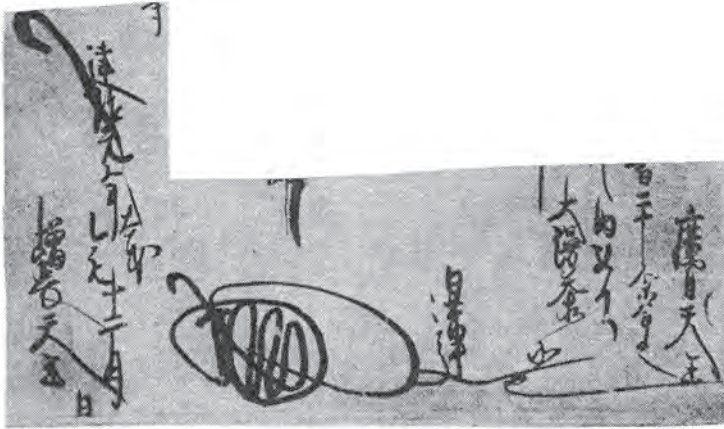
とある。煩惱即菩提のバン字^ニを個人的と把えると、弘安元年六月のポロン字^ニは四洲統一という視野を世界に向けている。「公場対決」を期し、世界統一の主である転輪聖王の最高位・「金輪聖王」を表するポロン字に、花押を交える日蓮聖人の真意——金輪聖王への再生と四海統一の預言性——が考察できる。

日蓮聖人が身延入山して四年目の弘安元年（一二七八）、聖寿五十七歳の三月廿一日、日蓮聖人が願望していた公場対決（諸宗との討議）の実現の可能性が出てきた。諸人御返事に

「所詮召^シ合^セ真言禪宗等、謗法、諸人等^ヲ令^メ決^セ是非^ヲ、日本国一同^ニ為^ラ日蓮^カ弟子^ト檀那^ニ」

と、宗祖は公場対決を「是非ヲ決スル」と表現している。そのとき諸宗を論破し、国主より「法華最第一」の公許を得た時、

「我が弟子等ノ出家ハ主上（天皇）上皇^ノ師^トと為^リ、在家^ハ左右ノ臣下ニ



バン字の花押



ポロン字の花押

列ラン、将タマタ一閻浮提皆此ノ法門ヲ仰ガン」（原漢文）

と、強烈な檄文を呈し、日蓮の弟子・本化の菩薩集団は、政治、権威、権力の天皇、上皇の指導的立場（師）に位置し、本化菩薩団を外護する「日蓮の檀越・在家」は左大臣、右大臣の如くであると宣している。仏法が政治の上に位置付けされている。一神教の神が皇帝の優位に有るが如く、日本仏教の中では、タブーでもあり、誠に珍らしい宗教表現である。この諸人御返事の強烈な日蓮聖人の心情が、「三大秘法稟承事」の

「戒壇トハ王法仏法ニ冥シ、仏法王法ニ合シテ、王臣一同ニ本門ノ三大秘密ノ法ヲ持チテ」⑥

と表現されるのである。

この建治三年、弘安元年（一二七八）は、疫病が全国に蔓延し、長雨が続き、日蓮聖人は体調を崩し（下痢）、天災と疫病の時代環境を生きる厳しい時期である。「中務左衛門尉殿御返事」には、

「日蓮^ガ下痢、去年十二月廿日事起り、今年六月三日、四日日々に度をまし」⑦

と、宗祖の病気が建治三年の十二月三十日に発症している事を自ら述べている。その病状の中で、公場対決の可能性の一報である。すぐ鎌倉の弟子檀越に返書「諸人御返事」を認め、同日に鎌倉在住の三位房に長文の「教行證御書」を著わし、公場対決の心得と法門を授けている。病状の日蓮聖人にとって激務の作業・布教活動であった。その時間的経過の流れは、次の如く厳しいものであった。

○建治三年十二月・法華初心成仏抄を著し、実相寺御書を駿河国実相寺豊前公に授与し、弟子教育をしている。この

ときすでに日蓮聖人は、体調不良になっている。

○同年冬、日蓮聖人の身延における住居環境は「庵室修復書」によると、

「やうやく四年がほど（過ぎ）直す事なく」⑧、四条金吾許御文の「（この）處は山中、風はげしく庵室はかこ（籠）の目のごとし。うちしく（打敷）物は草の葉、きたる物はかみぎぬ（紙衣）、身のひゆ（冷）る事は石の如し」⑨の状態であった。

○建治四年二月二十九日 改元。疫病、故歟。⑩

○弘安元年三月二十一日、鎌倉から身延の日蓮聖人に公場対決の可能性の報がもたらされた。諸人御返事に「日蓮一生之間、祈請並、所願、忽、令成就」^{テニ}とある。

○同年同日、鎌倉在住の三位房へ教行證御書を授け、公場対決の心得を説く。同抄に「其、外常に教へし如く問答あるべし……但し公場ならば可然^ル。私に不^レ可^ニ問註^ス」⑪の語がある。また在俗の檀越で法論力のある四条金吾に「夫、仏法と申^スは勝負をさきとし、王法と申^スは賞罰を本とせり」⑫、「仏法と申^スは道理也。道理と申^スは主に勝^ツ物也。」⑬と、法論の概念を述べている。そして「地涌の菩薩は仏の勅使」⑭、「妙法蓮華経は三世諸仏の萬行萬善の功德、萬戒の功德」⑮であり、それを「金剛宝器戒」とし、本門の一念三千は妙法五字の「金剛不壞の袋」に包まれている⑯と説く。宗祖が「金剛」という最強の「語」を使用し、地涌菩薩の再誕生を「金輪聖王」と導き出している。

「己に地涌の大菩薩上行出させ給ぬ。結要の大法亦弘らせ給べし。日本・漢土・萬国の一切衆生は、金輪聖王の出現の兆、優曇華に値へるなるべし」^⑮と教行證御書に述べている。

○弘安元年卯月（四月）、三回忌に当る日蓮の師・道善房の報恩に「華果成就御書」を認め、清澄の淨顯房、義淨房に送る。「日蓮法華經の行者となつて、善惡につけて日蓮房日蓮房とうたはるる此御恩、さながら故師匠道善房の故にあらずや。日蓮は草木の如く、師匠は大地の如し」^⑯

○同年五月廿二日、この年は長雨の天候不順である。霖雨御書「山中のながきあめ（雨）、つれづれ申ばかり候はず」^⑰

○同年六月廿五日、日女御前御返事に「今日本国の者、去年今年の疫病と、去正嘉の疫病とは人王に始めて九十余代に並なき疫病也。……日本国の一切衆生すでに三分二はやみ（病）ぬ。又半分は死ぬ。」^⑱と、疫病ノ全国蔓延を記している。

この時期、自身病んでいる日蓮聖人は疾病の関する記述が多く見られる。

○同年六月廿六日、富木入道殿御返事に「夫人に二病あり。一には身の病、……二には心の病、所謂三毒乃至八万四千の病也。此病は二天・三仙・六師等も治難し。……日本一同に日蓮をあだみて（中略）前代未聞の大膿患を起す事此始なり」^⑲

同日の中務左衛門尉殿御返事に「今の日本国、去今年こぞとしの疫病は四百四病にあらざれば華他・偏鵠へんじやくが治なも及はず。……日蓮カ下痢、去年こぞ十二月廿日事起り、今年六月三日・四日、日々に度をまし月々ニ倍増す。定業かと存スル處に貴辺の良薬を服シてより已来、日々月々に減じて今百分の一となれり。」²²

兵衛志殿御返事に「みそをけ（桶）一給畢。はらのけ（下痢）はさえもん殿の御薬になをり（治）て候。又このみそ（味噌）をなめて、いよく心ちなをり候ぬ」²³

日蓮聖人の病氣（下痢）が、四条金吾と池上兵衛志（宗長）の薬により好転した事が記されている。

しかし日蓮聖人は、自らの疾病は尋常でない「不治の病」であることを覚っていた様子である。その後の身延での住居環境は、好転より病状を進行させた。弘安元年六月三日の「阿仏房御書」によると、

「正月より今月六月一日に至り、連連此病息やむこと無し、死ぬる事疑ひ無きものか。経に曰く、消滅々已、寂滅為樂。今は毒身を棄て後に金身こんしんを受ければ豈に歎くべけんや。」²⁴（原漢文）

日蓮聖人は今回の病氣に「死」を覚悟している。病苦の毒身を棄て、金身を受く、「寂滅為樂」に「金身」を得るとは、如何なることか。日蓮思想において二つの変化身・再誕が考えられる。一つは立正安国論で謗法苦治する「護持正法の人・金剛身を成就」²⁵するの「金身」であり、その人物は「五戒を受けず、威儀を修せず、正法護持のため刀剣・弓箭・鉾むさくを持す人」、この人物は「不受五戒」為護正法「乃名大乘」の涅槃経文の如く「大乘人」と言われる。²⁶二つは観心本尊抄に言う、本化菩薩が金輪聖王と変化身した「賢王」である。

「此時（末法）初（初）地涌菩薩始出テ現シ世ニ、但以ニ妙法蓮華經ニ五字ヲ令服レ幼稚ニ、因謗墮惡必因得益トハ是也。……釈尊（初）初（初）弟子也。……但（法華經）八品之間ニ來還セリ。如キ是（高貴）大菩薩約（東）三（三）弘（弘）受（受）持（持）之（之）、末法（初）初（初）可（可）

不出歟。此四菩薩現折伏一時成賢王誠責愚王、行摂受一時成僧弘持正法」⁽²⁷⁾

釈尊初発心の弟子⇨本化地涌菩薩⇨高貴の大菩薩⇨本化菩薩

摂受(正法護持) — 僧 — 覺徳比丘
折伏(愚王誠責) — 賢王 — 有徳王

……
転輪聖王

(四) 曼荼羅本尊と賢王

日蓮聖人は本尊抄において、本化菩薩は「愚王誠責」する時は、「賢王」として再誕すると予言する。それは撰時抄、妙法比丘尼抄に言う賢王による仏法擁護・仏法選択論である。

「日出ぬれば星かくる。賢王来れば愚王ほろぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人南無妙法蓮華経と唱えば愚人の此に随はんこと、影と身と聲とのごとくならん。日蓮は日本第一の法華経の行者なることあえて疑ひなし。」⁽²⁸⁾

「善悪に付て国は必ず王に随ものなるべし。世間如此、仏法も然也……たとひ聖人、賢人なる智者なれど、王にしたがはざれば仏法流布せず」⁽²⁹⁾

「されば賢王の時は、仏法をつよく立てば、王両方を聞きあきらめて勝れ給智者を師とせしかば、国も安穩なり。所謂陳・隋の大王・桓武・嵯峨等は天台智者大師を南北の学者に召合、最澄和尚を南都の十四人に対論させて論じかち(勝)給しかば、寺をたてて正法を弘通しき。……今日日本国すでに大謗法の国となりて、他国にやぶらるべしと見えたり。此を知ながら申さずば、縦ひ現在は安穩なりとも後生には無間地獄に墮べし。」⁽³⁰⁾

このように日蓮聖人は、正法弘通に政治権力の賢王・帝王の仏教擁護が必要条件として認めている。四海帰命・世

界統一の際は、日蓮聖人自身が賢王として再誕・再生する予言の自己成就を確信している。その予見性が日蓮思想の中に存するのが本化教学の特徴である。その賢王の現実的実態を日蓮聖人は、法華経の守護神の中より四洲統一の理想王の転輪聖王（金輪聖王）を選出したのである。

四洲を統一する理想的帝王（賢王）は、転輪聖王の最高位・金輪聖王であり、一字金輪である。広大な宇宙の中で一字金輪は、その中心の軸星である。あらゆる萬星が軸星の北極星の回りを一昼夜で一回転する。中心の北極星は「不動」であり、「犯されざる星」である所から、天皇の本命星は北極星の「北辰妙見」となる。

一字金輪―軸星―北極星―妙見尊―天帝（賢王）

となる。日本神道では天照大神の先祖神たる天つ神、造化三神の天御中主命が北極星に配され、日本仏教の特に修験道に於ける星神信仰では、道教の錬金術と仏教の須弥山思想から、鉱物産出の山々では、妙見尊と虚空蔵菩薩は同一視する思想が生まれた。法華経序品第一の「名月天子、普香天子、宝光天子」の三光天子を、天台大師は法華文句に釈して、

「名月等の三光天子は、これ内臣、卿相の如し。名月（天）は是れ宝吉祥にて月天子大勢至の応作なり。普香（天）は是れ明星天子にして虚空蔵の応作なり。」

と釈し、法華経の三光天子のうち、星・普香天子は明星天子にして、虚空蔵の變化身であるとする。

天御中主命―妙見尊―虚空蔵菩薩―明星天子の同体化の思想が形成されてくる。天台比叡山と日吉社の山王神道か

ら生まれた思想であろう。道教的には妙見尊、仏教的には虚空蔵尊という関係である。

日蓮聖人は、転輪聖王の最高位「一字金輪王」（金輪聖王）の「賢王」として日本国に再生する予見性を文上・文底に述べている。特に法華経は、日本国に最も有縁の国であることに、宗祖は感激する。弥勒菩薩の瑜伽論に「東方二小国有り。其ノ中、唯大乘ノ種性ノミ有リ」、肇公の翻経記「此ノ經典、東北ニ縁有リ」の文に接し、日蓮聖人は、

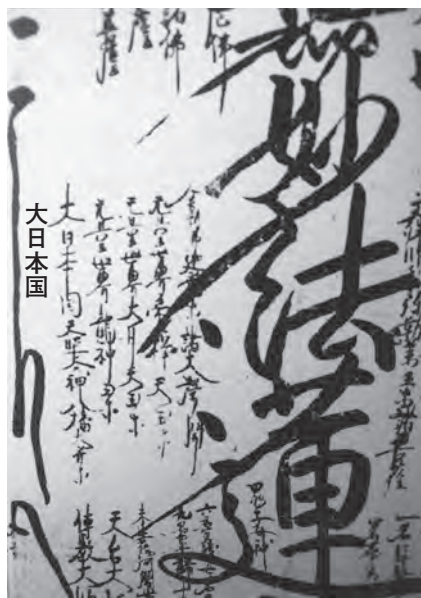
「西天、月支国、未申、方、東方、日本国、丑寅、方也。於二天竺二有レ、縁ニ於東北ニ、豈非ス日本国ニ哉。」^{③1}

と述べ、「予拜ニ見 此 記文ニ、両眼如レ瀧、一身偏レ悦。」^{③2}の法悦に浸るのである。その日本国とは地理的国土でなく、

本化菩薩が再誕する「本国土妙」としての宗教的国土である。「賢王」が生ずる国土である。その意味において日蓮聖人は末法という時代設計の中で、

「日蓮は日本国の人々の父母ぞかし。主君ぞかし、明師ぞかし。」^{③3}

「余は日本国の人々には上は天子より、下は萬民にいたるまで三の故あり。一には父母也、二には師匠也、三には主君の御使也。経云、即如来使。」^{③4}

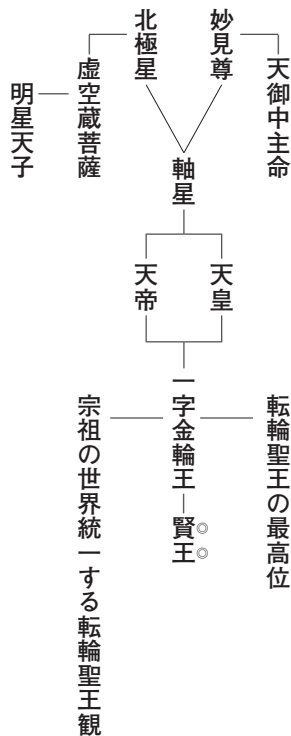


と、日蓮は「如来使」として主師親の三徳を資質具備と論じている。以上の如来使の再誕する日本国は、鎌倉期に世界覇権する大蒙古国に対し、日蓮聖人は「大日本国」と称号し、蒙古国に対峙した。藻原寺蔵の「無量世界」本尊には、宗祖は「大日本国天照大神、八幡大菩薩等」と、「日本国」に「大」を付し記載するのである。

大集経の第五の五百歳（末法）に起る闘争を、日蓮聖人は曾谷書に

「大日本国^ト与^ニ大蒙古国^ト闘争合戦^ス。相当^{レル}第五々百^ニ歟。」^{③⑤}

と表現している。



(五) 前代未聞の大闘諍と賢王

日蓮聖人は龍口法難、佐渡流罪により、法華経の説かれた「予言された人」となった。そして今度は、文永九年の自界叛逆難（北条時輔の乱）と同十一年の蒙古来襲の現証により、日蓮は「予言する人」に資質変化、昇化したので

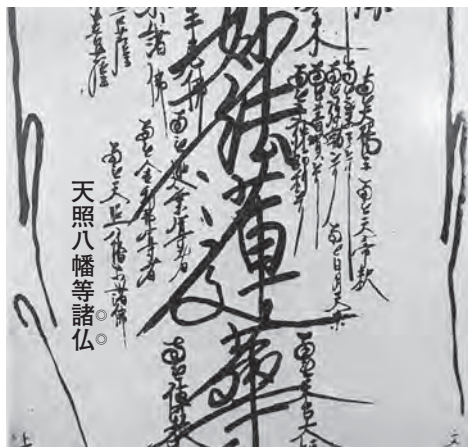
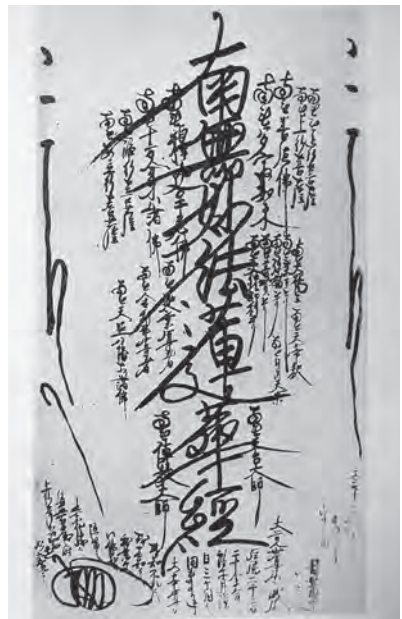
ある。

蒙古来襲直後の文永十一年十二月、日蓮聖人は「本因妙顯発」「本地開顕」の曼荼羅本尊を図顕した。十界諸尊のすべてに「南無」を冠し、天照・八幡の両神を「南無天照八幡等諸仏」と記し、日眼女釈迦仏供養事に「天照大神・八幡大菩薩も其、本地は教主釈尊也」³⁶と述べ、神国日本を「本国土妙」の仏国と釈されている。この保田妙本寺蔵の本尊は、次の点を表している。

(一) 久遠の釈尊垂迹の霊的血液が、天照・八幡二神に流れるを、寿命品の「或説己身、或説他身」を以て釈され、日本国「賢王」を追求する基礎理論の図形となっている。

(二) 神国日本は本来、「本時ノ娑婆世界」であるべき。本国土として本門戒壇・通一仏土の妙相を現ずるための「菩薩の国」であることを表している。

人類は世界平和を建設するために「世界最終戦」を経て、既存の文化、宗教、体制を改革し、諸の異質文化を統一すべき歴史的必然性が有ると考えるのは、日蓮聖人、ユダヤ教、キリスト教がある。ユダヤ、キリスト教に於いてハルマゲドン（世界最終戦）の後、神とイエスキリストが降臨し、



千年王国を想像する思想がある。日蓮聖人は撰時抄に

「彼々の国の悪王・悪比丘をせめらるるならば、前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起るべし。……その時、日月所照の一切衆生（中略）皆頭を地につけ、掌を合はせて南無妙法蓮華経と唱ふべし」³⁷

宗教には、人類の過去における謗法（罪障）を消滅・精算するに、個人的には「懺悔」による方法と、個を超える国家の謗法には、「力の対立」が「生みの苦しみ」として必然であることは、人類・宗教の歴史を観れば判然と理解できる。むなしい事に人類は、「話し合い」による問題解決に至らず、「鬪諍」による解決が最終である歴史を知っている。良し悪しは別にして、世界の国家境界線は、西欧の植民地宗主国（戦勝国）が、「戦争」の結果、地図上に引いた線が国境線となり定着した現実がある。法華経安樂行品に

「譬えば強力の輦輪王、兵の戦うて功あるに（中略）財物を与え勸喜贈与す。もし勇健にしてよく難事をなすことあるには、王髻中の明珠を解いて賜わん。」

と言ひ、降伏せざるを得ない敵対に輦輪王を出現させている。蒙古使御書に「（日蓮）此二十余年の間、私には昼夜に弟子等に歎申、公には度々申せし事是也。一切の大事の中に国亡るが第一の大事に候也。」と。³⁸ 国家の危機意識とその救済が日蓮仏教の特徴である。

開目抄に「例せば三皇已前に父（種）をしらず、人皆禽獸に同ぜしがごとし。寿量品をし（知）らざる諸宗の者、畜同。不知恩の者なり……伝教大師は（諸宗ハ）但有愛闕嚴義。天台法華宗具嚴愛義」³⁹と述べ、「愛」のみの宗教は不完全であり、法華経は「嚴と愛」の二義を具す完成された宗教と理解している。「嚴」の折伏を現ずる（愚王誠責）時は、本化菩薩が「賢王」として再現することを宗祖は予知しているのである。

註

- ①蒙古使御書 一一一三頁
- ②呵責謗法抄 七九〇頁
- ③上野殿御返事 一四五一一頁
- ④諸人御返事 一四七九頁
- ⑤教行証御書 一四七九頁
- ⑥三大秘法稟承事 一八六四頁
- ⑦中務左衛門尉殿御返事 一五二四頁
- ⑧庵室修復書 一四一一頁
- ⑨四条金吾許御文 一八二二頁
- ⑩弘安改元事 一四五四頁
- ⑪教行証御書 一四八二、五頁
- ⑫四条金吾 一三七八頁
- ⑬右 同 一三八四頁
- ⑭教行証御書 一四八六頁
- ⑮右 同 一四八八頁
- ⑯右 同 一四九八頁
- ⑰右 同 一四八九頁
- ⑱華果成就御書 一五〇〇頁
- ⑲霖雨御書 一五〇四頁
- ⑳日女御前御返事 一五一二頁
- ㉑富木入道殿御返事 一五二二頁
- ㉒中務左衛門尉殿御返事 一五二四頁
- ㉓兵衛志殿御返事 一五二五頁
- ㉔阿仏房御書 一五〇八頁
- ㉕立正安国論 二二二頁
- ㉖右 同 二二二頁
- ㉗觀心本尊抄 七一九頁
- ㉘撰時抄 一〇四八頁
- ㉙四条金吾殿御返事 六六一頁
- ㉚妙法比丘尼御返事 一五六二頁
- ㉛曾谷入道殿許御書 九〇九頁
- ㉜右 同 九〇九頁
- ㉝一谷入道御書 九九六頁
- ㉞下山御消息 一三三〇頁
- ㉟曾谷入道殿許御書 九〇九頁
- ㊱日眼女釈迦仏供養事 一六二三頁
- ㊲撰時抄 一〇〇八頁
- ㊳蒙古使御書 一一一二頁
- ㊴開目抄 五七八、九頁